

[教育実践報告]

学校支援ボランティアを通した学生の学びの可能性

永友真紀^{1,*}

Possibilities for students learning through school support volunteers

Maki NAGATOMO

要旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の子どものへの影響が明らかとなりつつあった2021年3月に熊本市立A小学校から学校支援ボランティアの依頼を受けた。感染が落ち着いた2021年11月に「子どもの言語臨床研究会」に所属する学生によって活動を開始し、11月～12月に8回（延べ30名）、2022年6月に4回（延べ11名）のボランティア活動を行った。本研究ではこれまでの活動を振り返るとともに、学生に対するアンケート調査の結果から学校支援ボランティアの意義や課題について検討した。結果、子どもと接する機会が得られること、子どもへの対応を知ることができることが学校支援ボランティアの意義であると考えられた。一方、小学校の先生から具体的な支援内容について事前に情報を得ることや、参加した学生へフィードバックをする機会を確保することが今後の課題であると思われた。

キーワード：学校支援ボランティア、小学校、学習支援、大学生、アンケート調査

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の感染拡大によって2020年3月から実施された小中学校の一斉休校は、子どもの生活習慣やメンタルヘルスに大きな影響を与えた。高坂（2021）¹⁾は、臨時休業中の小学生の保護者にアンケート調査を行い、生活習慣の「食習慣の乱れ」がストレス反応全て（「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」と、生活習慣の「不規則な睡眠」「学習時間の減少」「テレビ・ネット視聴の増加」がストレス反応の「無気力」と正の相関を示したと報告している。また、小・中・高校生を対象として2020年7月～10月にかけて行われた大西²⁾のアンケート調査では、「つまらなく感じるがあった」という設問に52.0%が、「何もないのに不安に思うことが

あった」という設問には約3割（33.2%）が「ある」と回答している。国立成育医療研究センターが2021年2月～3月に実施した「コロナ×こどもアンケート」³⁾においても、全体の75%に何らかのストレス反応・症状がみられたことが報告されている。

このようにCOVID-19による子どもへの影響が明らかになりつつあった2021年3月に、筆者は熊本市立A小学校から学生による学校支援ボランティアの依頼を受けた。COVID-19の感染が落ち着いた2021年11月に活動を開始し、11月～12月に計8回のボランティア活動を行い延べ30名の学生が参加した。2022年度は6月に4回のボランティア活動を行い延べ11名の学生が参加した。

本学は、「知識」「技術」「思慮」「仁愛」を四綱領として掲げており、このうち「思慮」「仁愛」は課外活動やボランティア、海外留学などを通して身に

所属

熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻
責任著者：nagatomo@kumamoto-hsu.ac.jp

つけることが求められている。今回実施した学校支援ボランティアは、学生にとって「思慮」「仁愛」を身に付ける絶好の機会となり得ると考えられるが、本学にとって初めての試みであるため手探りで実施しているのが現状である。

そこで本研究では、学校支援ボランティアを実施するに至った経緯とこれまでの活動を報告するとともに、学生に対して行ったアンケート調査の結果から、学校支援ボランティアの意義や課題について考える。

Ⅱ. 学校支援ボランティアとは

「学校支援ボランティア」は1997年1月に発表された文部省（当時）の「教育改革プログラム」の中で初めて記載された言葉⁴⁾であり、「学校の教育活動について地域の教育力を生かすため、保護者、地域人材や団体、企業等がボランティアとして学校をサポートする活動」と定義されている⁵⁾。熊本市では平成12年度（2000年）からこの学校支援ボランティア制度を開始している⁶⁾。

学校支援ボランティアの活動内容は、①授業に補助的に入る、ドリルの採点を行うなど授業の補助や実験、実習の補助等の学習支援活動、②部活動の指導、③図書の整理や読み聞かせ、グラウンドの整備や芝の手入れ、花壇や樹木の整備等の校内の環境整備、④登下校時等における子どもの安全確保、⑤学校行事の運営など⁷⁾多岐にわたる。教員養成課程を有する大学のなかには、学校支援ボランティアをカリキュラムの中に位置づけ「学習支援活動」を行っているところもある^{8) 9) 10) 11) 12)}。

廣澤ら¹³⁾は、自身が担当する学校支援ボランティアの活動データを用いて、活動場所や支援内容について検討した結果、活動場所については、低学年では学級での活動が90%以上を占めるのに対し、高学年では学級での活動に加え保健室等での活動が増えること、支援内容としては「学習支援」「話し相手」「遊び相手」が多くを占めることを明らかにしている。また、活動場所別の活動内容を検討した結果、活動場所を問わず「学習支援」が中心的活動であるものの、教室では一斉授業についていくのを支援するための関わりが、相談室等や家庭では対象児の学修進度に合わせた個別支援が主であるという違いがあることを報告している¹³⁾。また、大学生による学

校支援ボランティアは、「学習支援」が主な目的でありながらも、児童・生徒の話し相手や遊び相手となることで、「情緒的安定」や「積極的態度」「充実した時間」「人間関係の拡がり」「視野の拡がり」「学習への意欲」¹³⁾など児童の情緒面や意欲にも好影響を及ぼすことが確認されている。その一方で、教師が多忙で学校支援ボランティアとの連携を図ることが難しい^{5) 13) 14)}、活動期間の短い学生は動き方に悩みながら活動を行っている⁵⁾、日時の設定や交通手段の確保が難しい¹³⁾、学校支援ボランティアのマイナスの影響を認識している教員も存在する¹⁵⁾など、いくつかの課題も指摘されている。

Ⅲ. 小学校での学校支援ボランティア

1. 活動開始の経緯

以前、研究を依頼したA小学校より、授業中に個別対応が必要な児童の補助を学生に行って頂けないかとの相談を受けた。しかし、相談を受けた2021年3月の時点で本学の行動基準は「対応レベル3」であり、課外活動が「原則として禁止」されていたことから学生のボランティア活動は実施できない旨を説明し了承を得ていた。COVID-19の感染が落ち着いた2021年10月に学内の行動基準が「対応レベル2」に引き下げられたため、危機対策本部に「新型コロナウイルス感染症に係る課外活動の特例許可申請書」を提出し、許可を得たうえで活動を開始した。

2. 2021年度（令和3年度）の活動

学校支援ボランティアの活動開始に先立ち、11月12日にA小学校にて、校長、教頭、「子どもの言語臨床研究会」に所属する学生6名とサークル顧問である筆者の計9名で事前の打ち合わせを行った。小学校からは、2020年2月28日から5月末にかけて行われた一斉休校のために入学が延期となった2年生において落ち着きのない児童が多いこと、2021年9月に実施された分散登校の後から1年生において学校生活のリズムが崩れてしまった児童が多いことが報告された。その状況を踏まえ学生には、「授業中に落ち着きのない児童や先生の話聞いていない・理解していない児童への声かけ」「児童の話し相手」を行って欲しいとの要望があった。話し合いの中で、学生による学校支援ボランティアは学生の講義がない時間帯に行うこと、活動時間は午前または午後の

2時間程度（9：30～11：30または13：50～15：30）とすること、1回の参加人数は3～4人で調整すること、スケジュールは前月に公開される対面授業スケジュールをもとにサークル顧問が調整し、事前に教頭に連絡すること、具体的な支援内容については当日担当するクラスの担任の指示を仰ぐことが取り決められた。

2021年度は11月17日～12月22日にかけて計8回のボランティア活動を行い、延べ30人の学生が参加した。2022年1月以降も活動を行う予定でスケジュールを調整したが、COVID-19の再拡大により1月中旬から学内の行動基準が「対応レベル4」に引き上げられ、対面授業の遠隔授業への切り替え、課外活動の禁止等の措置が取られたため1月以降の活動は中止した。

3. 2022年度（令和4年度）の活動

2022年4月に行動基準が「対応レベル2」に引き下げられたのに伴い、改めて「特例許可申請書」を危機対策本部に提出し許可を得たうえで活動を再開した。

小学校側と相談した結果、2022年度は5月の運動会が終わり児童の学校生活が落ち着く6月から活動を行うこととした。6月は計4回のボランティア活動に延べ11名の学生が参加した。

IV. 倫理的配慮

学生へのアンケート調査は熊本保健科学大学ライフサイエンス倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2022-03）。本研究は本学の学生を対象として教員が行う研究であるため、学生に強制力が働かないよう留意した。学生には本研究の目的や意義について口頭と文書で説明し理解を得た。加えて、アンケートへ回答するか否かは学生本人の自由意思により決定してよいこと、回答しない場合も今後のサークル活動やボランティア活動において不利益は一切生じないことを説明した。

V. 学生へのアンケート調査

1. 対象

本学のサークル「子どもの言語臨床研究会」に所属し、2021年11月から12月に花園小学校において実

施した学校支援ボランティアに1回以上参加した学生10名を対象とした。対象者は女性10名で、2021年度に本学言語聴覚学専攻2年に在籍した学生であった。

2. 方法

2022年6月から7月にかけて無記名アンケートを実施した。対象となる学生に説明文書を用いて本研究の目的と意義、方法、倫理的配慮等について説明し、アンケート用紙を配布した。研究に同意する学生はアンケートに記入し所定の回収場所に提出し、同意できない学生はアンケート用紙を手元で処分することとした。

アンケートの質問内容は、①学校支援ボランティアに参加しようと思った理由（選択式・複数回答可）、②ボランティアを行った学年と支援内容（学年は選択式、内容は自由記述式）、③学校支援ボランティアに参加した感想（5項目・回答は5段階評価）、④参加してよかった点や改善すべき点（自由記述式）、⑤学校支援ボランティアを続けるうえであればよいと思う取り組み（自由記述式）とした。学校支援ボランティアに参加した感想の5項目は、「やりがいを感じる」「STになるための勉強に役立つ」「時間的に負担となる」「ストレスを感じる・疲れる」「今後も続けていきたい」とし、1：当てはまる、2：やや当てはまる、3：どちらともいえない、4：あまり当てはまらない、5：当てはまらない、の5段階のいずれかにチェックしてもらった。結果は、選択式と5段階評価による回答は記述統計にて、自由記述による回答はテキスト形式にデータ化しテキストマイニングにて分析した。テキストマイニングには樋口ら¹⁶⁾が開発したフリーソフトウェアKHCoderを用いた。

3. 結果

アンケートは対象者10名のうち6名から回答を得た（回収率60.0%）。各質問項目の結果を以下に示す。①学校支援ボランティアに参加しようと思った理由（複数回答可）

ボランティアに参加しようと思った理由は、「勉強になると思ったから」が6名、「ボランティア活動に興味があったから」が6名、「小児領域の臨床に興味があったから」が3名、「小児の実習施設が少ないから」が1名、「家が近いから」が1名で

あった。小児領域の臨床に興味がある学生のみが参加を希望しているのではなく、「勉強になる」「ボランティアに興味がある」といった活動そのものへの関心から参加を希望した学生が多かった（図1）。

②学生がボランティアで介入した学年と支援内容

学生が支援を行った学年は1年生，4年生，5年生，6年生と支援学級であり，2年生や3年生での実施はなかった。支援内容としては，「席を立てて動き回る児童を自分の席に誘導する」「授業とは関係のないことをしている児童に集中するように促す」「先生の話集中してきくことが苦手な児童へ声をかける」など，授業への集中を促す声かけが低学年，高学年ともに共通する支援として挙げられていた。加えて高学年では，「勉強の仕方が分からない子の

隣で教える」「板書をしていない子に写すように言う」「問題が分からない子にヒントを与える」など，個別の学習支援も行われていた（表）。

③ボランティアに参加した感想

結果を図2に示す。「やりがいを感じる」は「当てはまる」が3名，「やや当てはまる」が2名，「あまり当てはまらない」が1名であった。「STになるための勉強に役立つ」は「当てはまる」が2名，「やや当てはまる」が3名，「どちらともいえない」が1名であった。「時間的に負担となる」は「あまり当てはまらない」が1名，「当てはまらない」が5名であった。「ストレスを感じる・疲れる」は「当てはまる」が1名，「あまり当てはまらない」が2名，「当てはまらない」が3名であった。1名の

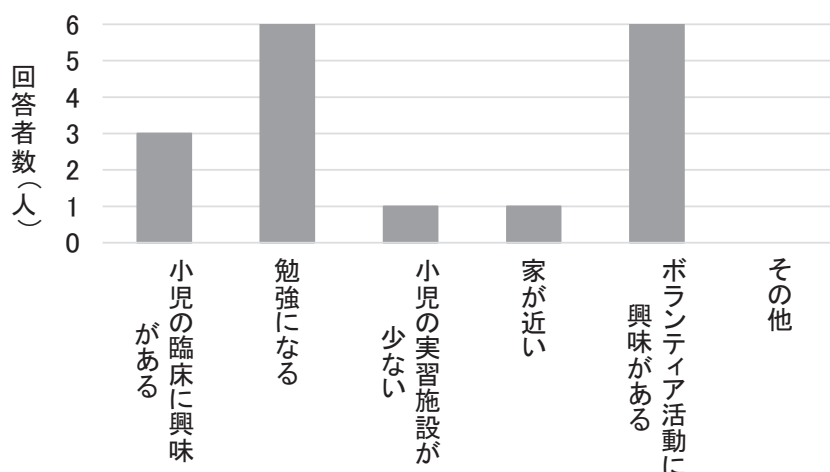


図1 学校支援ボランティア活動に参加しようと思った理由（複数回答：n = 6人）

表 ボランティアを実施した学年と支援内容

学年	支援内容
1年生	・算数の授業で席を立てて動き回る子を自分の席に誘導する。授業と関係のないことをしている子を授業に集中するように促す。
4年生	・体育の授業で子どもの様子をみる。
5年生	・手が止まっている子，何をしたらいいか分からない子，勉強の仕方が分からない子の隣について教える。 ・算数のペアワークへの参加。英語ゲームへの参加。
6年生	・手が止まっている子，何をしたらいいか分からない子，勉強の仕方が分からない子の元へ行き，隣について教える。 ・授業のサポート（板書をしていない子に写すように言う。問題が分からない子にヒントを与える。）テスト（練習）で分からないところがある子のサポート。 ・授業中に前の子とすぐ話をしたり，キョロキョロしたりと先生の話集中して聞くことが苦手な子のサポート（算数）。本人に話を聞くように声をかける。
支援学級	・まとめの問題で分からないところの解き方を教えたりサポートをしたりする（算数，理科）

学生がストレスを感じる・疲れると回答しているものの、ほとんどの学生は時間的にも精神的にもあまり負担を感じてはいなかった。また、「今後も続けていきたい」は「当てはまる」が3名、「やや当てはまる」が3名で、アンケートに回答した全ての学生が今後もボランティアを続けていきたいと考えて

いた（図2）。

④学校支援ボランティアに参加してよかった点や改善すべき点

自由記述で得られた回答を共起ネットワークで作図したところ4つのサブグループが形成された（図3）。サブグループは「機会」を中心に「子、接す

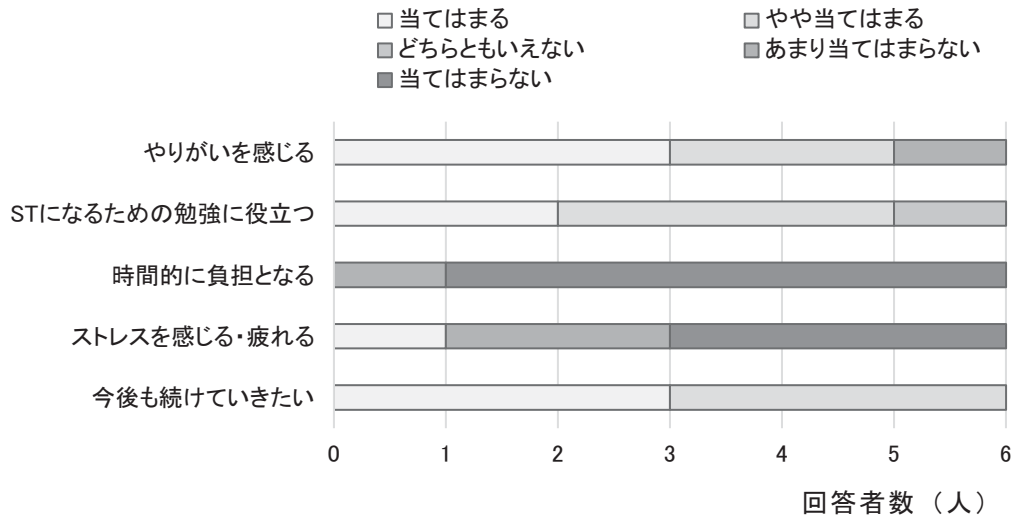


図2 学校支援ボランティアに参加した感想

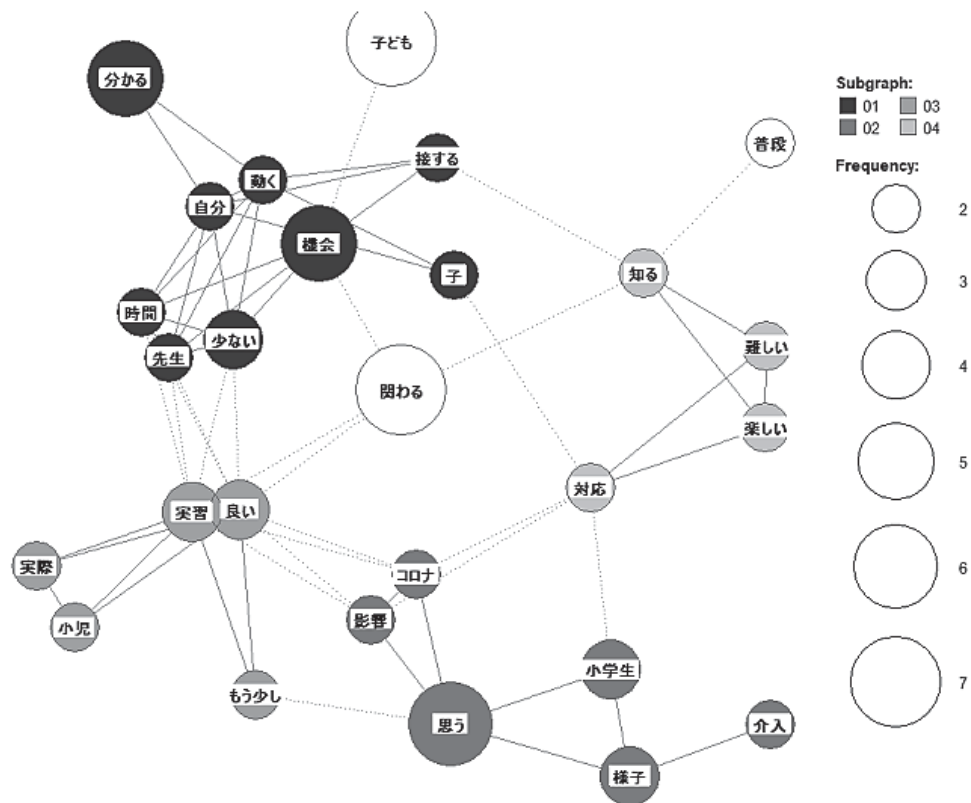


図3 参加してよかった点や改善すべき点についての共起ネットワーク

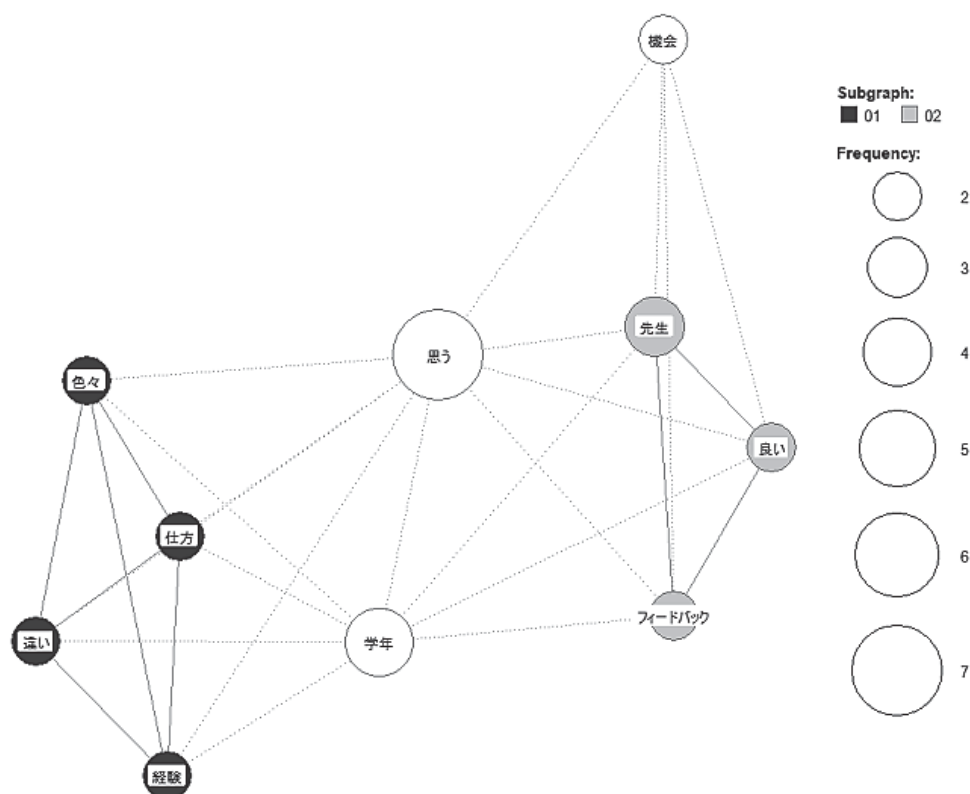


図4 このような取り組みがあれば良いと思うことについての共起ネットワーク

る、自分、動く、少ない、時間、先生」というサブグループと、「実習、良い」を中心に「実際、小児、もう少し」というサブグループ、「思う」を中心に「コロナ、影響、小学生、様子、介入」というサブグループ、「難しい、楽しい、知る、対応」というサブグループであった。学生の回答には「子どもと関わる機会が得られた」「子どもと接する楽しさを知った」「子どもへの対応の仕方を学べた」「先生と関わる時間が少なかった」「どう動いていいかわからなかった」などの記述がみられた。

⑤このような取り組みがあればよいと思うこと

質問に対して得られた回答を共起ネットワークで作図したところ、「経験、違い、仕方、色々」というサブグループと「先生、良い、フィードバック」というサブグループが得られた。学生の回答には「他の学年も回ってみたい」「色々な学年を経験できるよう振り分けてもらえたらよい」「担任の先生からのフィードバックがあれば嬉しい」などの記述がみられた（図4）。

VI. 考察

学校支援ボランティアに参加しようと思った理由については、全ての学生が「勉強になったと思ったから」「ボランティア活動に興味があったから」と回答した。一方、「小児領域に興味があるから」は3名であり、必ずしも小児の言語聴覚療法に興味のある学生だけが参加しているわけではなく、勉強への意欲やボランティア活動への興味・関心が参加の動機になっていることがうかがえた。また、「小児の実習施設が少ないから」は1名のみであったことから、ほとんどの学生は学校支援ボランティアを臨床実習とは別のものとして捉えたうえで、参加を希望していると考えられた。

学生がボランティアで介入した学年は、1年生、4年生、5年生、6年生と支援学級であった。A小学校からの学校支援ボランティアの依頼のきっかけとなったのは、2020年度の入學時に休校措置がとられた2年生と、2021年度の9月に分散登校が行われた1年生であったが、今回のボランティアでは2年生への介入はなく、むしろ高学年への介入が多かった。このことからCOVID-19の影響の有無に関わら

ず、支援が必要な児童が複数の学年に存在することが推察された。支援内容としては、1年生では授業への集中を促すための声かけが主であったのに対し、5・6年生では集中を促す声かけに加え勉強の仕方が分からない児童への個別の学習支援も行われていた。廣澤ら¹³⁾は学校支援ボランティアの教室での活動は、学習支援をはじめ授業や集団活動といった「場」への適応を促すことが中核にあると述べている。今回のボランティア活動においても、「場への適応を促すこと」と「学習支援」が主な活動であり、この2つが学校支援ボランティアにおける学生の重要な役割であると考えられた。

学校支援ボランティアに参加した感想では、「やりがいを感じる」に5名が「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した。COVID-19の影響で2021年度の活動期間は約2か月間に限定されたものの、学生はやりがいを感じながら意欲的に活動していたことがうかがえた。「STになるための勉強に役立つ」には5名が「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した。学校支援ボランティアでは、「場への適応を促すこと」や「学習支援」が学生の主な役割であるため、一人ひとりの症状に応じて個別に訓練や指導を行う言語聴覚療法とは本質的に支援内容が異なる。しかしながら、普段接する機会の少ない小学生に直接接することは、言語聴覚士に必要なコミュニケーション能力や自分で考えて臨機応変に行動する力を磨く絶好の機会になると考えられる。「学校支援ボランティアに参加してよかった点や改善すべき点」の共起ネットワークの中に「機会」とともに「子ども」「接する」という言葉があることから、参加した学生自身も子どもと接する機会が得られることが学校支援ボランティアの一つの利点であることを認識していると推察された。一方、「時間的に負担となる」には全ての学生が「当てはまらない」または「あまり当てはまらない」と回答した。今回の活動は対面授業がない午前または午後の2時間程度を設定して行った。従って、学生は午後に講義がある場合は午前中の2時間程度、午前に講義があった場合は午後の2時間程度をボランティア活動に費やしたことになる。休日にわざわざ出向く必要がないために、学生にとっては時間的な負担が少なかったものと思われた。また、「ストレスを感じる・疲れる」には5名が「当てはまらない」または「あまり当てはまらない」と回答したが、1名は「当てはま

る」と回答した。「今後も続けていきたい」には全ての学生が「当てはまる」「やや当てはまる」と回答しており、学生は継続的にボランティア活動を行ってきたいという意欲をもっていることが判明した。

「参加してよかった点や改善すべき点」については、共起ネットワークのサブグループと代表的な記述内容から、学生は子どもと接する機会が得られることや、子どもへの対応を知ることができること、実習に役立つことを利点として捉えていると考えられた。改善すべき点としては、先生と関わる時間が少ないことが課題であると考えられた。また、記述内容の中に「どう動いていいかわからない」という記載があったことから、先生からの具体的な指示がないまま手探りで活動を行っている現状も明らかとなり、学生がストレスを感じる要因となっている可能性が示唆された。小・中学校の教師が多忙であるために学校支援ボランティアとの連携や情報共有が難しいという問題はこれまでも指摘されており⁵⁾¹³⁾¹⁴⁾、今回の学校支援ボランティアでも同じ課題が判明した形となった。今後、学校支援ボランティアを継続するにあたっては、支援を行うクラスとそこでの具体的な支援内容について事前に情報を得て、学生に伝えることを検討する必要があると考えられた。

「このような取り組みがあればよいと思うこと」については、共起ネットワークと学生の代表的な記述から、色々な学年に介入して対応の違いを学びたい、ボランティア活動に対する小学校の先生からのフィードバックがあれば良い、という2点があると思われた。介入する学年については、これまでは小学校側の調整役である教頭に一任していたが、本研究の結果から明らかとなった学生の要望を伝えたいと、可能であれば、学生が経験したことのない学年への配置をお願いしたいと考えている。また、フィードバックについては、学生が自身のボランティア活動を振り返り次の支援に活かすためにも、介入したクラスの先生方から意見を頂く機会を設けることが必要であると考えられる。

本学言語聴覚学専攻では、1年後期に1週間の入門実習、3年後期に3週間の臨床実習Ⅰ（評価）と8週間の臨床実習Ⅱ（実践）が配置されている。言語聴覚士に必要なコミュニケーション能力や自分で考えて臨機応変に行動する力を磨き、3年生で行わ

れる臨床実習に活かすためには、今回実施した学校支援ボランティアをはじめとする様々なボランティア活動を、2年生までに経験することが重要であると考ええる。

幸いにもA小学校からは、学生のボランティア活動に対して感謝の言葉を頂いている。学生の学びたい、人の役に立ちたいという意欲を尊重し、学校支援ボランティアの活動を通してその意欲に応え、さらに学生の学びにつなげていくためには、小学校の先生方とより密に連携し、学校支援ボランティアの活動を継続していくことが必要であると考ええる。

本研究における利益相反は存在しない。

【引用文献】

- 1) 高坂康雅. 親の認知した臨時休業中の小学生の生活習慣の変化とストレス反応との関連. 心理学研究, 92 (5): 408-416, 2021.
- 2) 大西良. コロナ禍における子どものQOL～実態調査の結果を中心に～. 筑紫女学園大学研究紀要, 17: 87-96, 2022.
- 3) 国立成育医療研究センター. コロナ×こどもアンケート 第5回調査報告書. 2021, https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC5_repo_20210525.pdf (2022年8月26日検索)
- 4) 廣瀬隆人. 学校支援ボランティアの概念の検討. 宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告, 10-11合併号: 25-34, 2003.
- 5) 高田莉恵, 中地展生. 教員及び学生からみた学校支援ボランティアの現状と課題. 帝塚山大学心のケアセンター紀要, 15: 19-23, 2019.
- 6) 熊本市教育委員会. 第二章 教育目標達成への取り組み～第2節 生きる力をはぐくむ学校教育の推進～5 学校・家庭・地域社会の連携と推進. 2012, https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=2147&sub_id=1&flid=11547 (2022年8月19日検索)
- 7) 文部科学省国立教育政策研究所社会教育実践研究センター. 平成20年度学校支援ボランティア活動の推進方策に関する調査研究報告書. 2008, http://www.nier.go.jp/jissen/chosa/rejime/2008/07_volunteer/99_all.pdf (2022年8月19日検索)
- 8) 犬塚美輪, 三浦巧也, 滝沢和彦. 中長期的な学校支援ボランティア活動における学生の視点の変化. 大正大学研究紀要, 102: 1-18, 2017.
- 9) 森下覚, 久間清喜, 麻生良太, 他. 学校支援ボランティアにおける省察の実践の支援体制と実習生の学習の関連性について－大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して－. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 32 (2): 261-274, 2010.
- 10) 黒沢幸子, 日高潤子, 張替裕子, 他. 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長－その様相とキャリア教育の視点からの考察－. 目白大学心理学研究, 4: 11-23, 2008.
- 11) 長谷川哲也. 教員養成における「学校支援ボランティア」の再考: S市小中学校教員への質問紙調査から. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 23: 113-121, 2015.
- 12) 鈴木静香, 織田安沙美, 大西将史, 他. 地域組織間連携による学校支援ボランティア事業の支援体制づくり: 非専門家(大学生)を支える発達障害支援アドバイザーの活動実践を事例として. 福井大学教育実践研究, 41: 37-49, 2016.
- 13) 廣澤愛子, 大西将史, 笹原未来, 他. 非専門家(大学生)による学校支援ボランティアが果たす役割: 教師への質問紙調査の質的分析. 臨床心理学, 18 (6): 743-753, 2018.
- 14) 廣澤愛子, 大西将史, 笹原未来, 他. 大学生による学校支援ボランティアにおいて児童生徒に肯定的な変化が見られた事例の特徴. 教育心理学研究, 69: 187-203, 2021.
- 15) 杉本希映. 大学生による学校支援ボランティアの現状と課題. 目白大学心理学研究, 9: 107-119, 2013.
- 16) 樋口耕一, 中村康則, 周景龍. 第一部入門テキストマイニング. 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析, ナカニシヤ出版, 2-94, 2022.

(令和4年11月2日受理)

Possibilities for students learning through school support volunteers

Maki NAGATOMO

Summary

In March 2021, when the influence of the COVID-19 pandemic on children was becoming clear, we were requested by Kumamoto City Hanazono Elementary School to become school support volunteers. Beginning in November 2021, as the pandemic was waning, students belonging to the “Children’s Language Clinical Study Group” worked eight volunteer sessions, in November and December (30 people volunteered), and four more in June 2022 (11 people volunteered). In this study, we reviewed past volunteer activities and considered the significance and problems faced by school support volunteers based on the results of a questionnaire survey of students who participated in this effort. We determined that the significance of school support volunteers was their opportunities to meet with children and learn how to deal with them. At the same time, both obtaining information in advance from elementary school teachers about specific support content, and ensuring opportunities to give feedback to participating students, should be included in future volunteer programs.